

かつの微生物農法研究会便り

H19.5.1 Vol.5



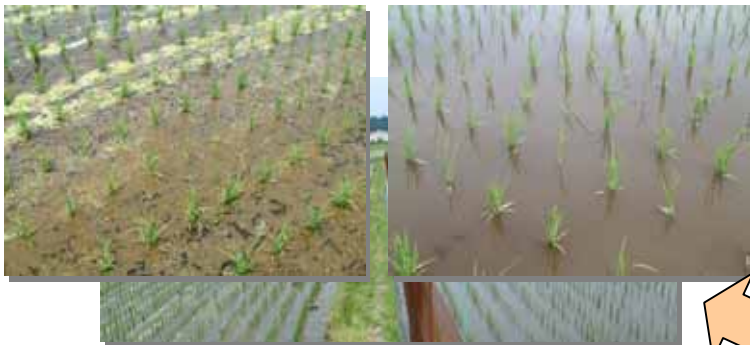
いよいよ田植え。まっすぐに植えていくのは、結構、技術と経験が必要。

皆様の「美味しい」のために。ピールの宣伝ではありませんが。

3月になってから本格的な冬になった感のある今年、季節はずれの雪もようやく消えて、当地鹿角は農繁期に突入しました。まずは手間のかかる健全な苗づくり。そして5月中旬から下旬にかけて、いよいよ田植え作業となります。年々、お客様からの「美味しかった」の声や激励のお言葉を多数いただくようになってきて、今年も気合が入っております。私たちの作っているお米は、品種は「あきたこまち」、産地は「秋田県産」と、いわばありふれた産地品種銘柄ですが、こだわっている部分は「あきたこまち」でも「秋田県産」でもなく、食べてくれる方に喜んでもらえる「美味しい米」です。そういう意味では、固定観念がついてしまっている「あきたこまち」や「秋田県産」という名前はむしろ忘れていただき、商品名で選んでいただけるように頑張っていきたいと思っています。

「微生物農法」って何のこと？

水田の土の中には沢山の種類、膨大な数の微生物が活動しています。私たち人間のお腹では善玉菌と悪玉菌のバランスが崩れると体調が悪くなりますが、イネにとってのお腹を水田土壌、とらえたのが微生物農法です。水田の土も微生物のバランスを整えてやるのがとても重要で、そのバランスが崩れるとイネが病気にかかりやすくなったり、生長が上手くいかなかったりします。有機肥料や堆肥で微生物バランスを良好に保つことで、健康で自ら美味しくなる作物作りをするというのが微生物



写真左が「微生物農法」の田面、右は「アイガモ農法」の田面です。微生物農法の田んぼは、正直にいうとちょっと汚いようにも見えますが、これは藻などの生物が大量に発生しているため。これが田んぼの中の（イネを含めた）生態系を形成し、独特の自然な美味しさをかもし出す生命のスープになるのです。

食べてお得なサービス実施中。

ポイントシールをためて送ると必ずもらえるプレゼント！



お買い上げいただいた商品についてくるシールを集めて専用台紙に貼って送ると、お米などをめれなくプレゼント！ お問い合わせは 0120-08-2028 まで

TOPICS

講談社の「日本一おいしい米の秘密」という本で、微生物農法米あきたこまち「花輪ばやし」が紹介されました。機会があれば見てみてください！！

生産地から

世間的には5月といえばゴールデンウィークに始まり総会シーズンの後半、新しい仕事や学校に慣れてきて余裕の出る時期といったところでしょうか。当地鹿角では、基幹産業は農業と観光(典型的な田舎のスタイルという話もありますが)、農業と観光産業にとって、5月は年中で最も繁忙な時期の一つです。農業では苗作りに耕起・田植え、観光では新緑の十和田湖・奥入瀬や雪残の八幡平・白神山地…。当地に数多ある温泉や史跡なども沢山の皆様を迎えています。

ところで、当地鹿角は観光地でもありながら、岩手県の遠野に引けを取らぬほど民間伝承や伝説、民話の多い土地。今回は、(以前も一度ご紹介しましたが)当地の伝説の中でも最も有名なもののひとつ、「錦木塚の伝説」をご紹介します。このお話、平安時代の都の貴族たちにいたく気に入られ、これを題材にした歌が多く作られているほか、世阿弥によって謡曲にもなり、今でも人気を博す題目です。

「錦木塚の伝説」

昔、今の錦木(にしきぎ:鹿角市十和田錦木)の地域を都から来た狭名大夫(さなのきみ)という人が治めていた。その人から8代目になる狭名の大海(おおみ)という人には、政子姫(まさこひめ)というとても美しい娘がいた。政子姫は細布を織るのがとても上手な人であった。一方そのころ、近くの草木(くさぎ)というところに、錦木(にしきぎ)を売ってを仕事にしていた若者が住んでいた。錦木というものは、「仲人木(なこうどき)」とも言って縁組に使うものであり、当時は、男性が好きな女性の家の前に錦木を置き、その錦木を女性が拾って家の中に入れた場合は、結婚してもよいという意味の決まりがあった。

ある日、若者は市日のときに政子姫を初めて見て、その美しさにひかれ恋いこがれてしまった。若者は、翌日から毎日毎日、雨の降る日も風の吹く日も雪の吹雪く日も一日も休まず、政子姫の家の門の前に錦木を持ってきては立てた。

しかしながら、錦木は一度も拾われて家の中に入れられることはなく、家の前に立てられたまま増えるばかりであった。そのたびに若者は草木へ戻る帰り道のそばの小川で、涙を流して泣いた。その川は、のちに涙川と言われるようになった。

一方、政子姫は、家の門の前に毎日錦木を立てられているうちに、機織りする手を止め、こっそり若者の姿を見るようになっていた。そして、いつの間にか、政子姫も若者を好きになっていた。だが、いくら若者が錦木を立てても、身分が違うことや、もう一つ重大な訳があって結婚の約束はできなかった。その訳というのは、次のようなことである。

当時、五の宮岳(ごのみやだけ)の頂上に巢を作っている大ワシが里に飛んできては子供をさらっていた。あるとき、若い夫婦の小さい子供が大ワシにさらわれて村人がとても悲しんでいたとき、ある一人の旅の坊さん、「鳥の羽根を混ぜた織物を織って子供に着せてやれば、大ワシは子供をさらっていかなくなる。」と教えてくれた。布に鳥の羽根を混ぜて織ることは非常に難しく、よほど機織りがうまくなければできないものであった。そのため、機織りの上手な政子姫は皆からお願いされていた。政子姫は、子供をさらわれた親の悲しみを自分のことのように思い、3年3月を観音様に願かけしながら布を織っていたのだ。その願かけのために、政子姫は若者と結婚する約束ができなかったのである。若者は、そういう理由も知らず、毎日せせと3年もの間、錦木を姫の家の前に立てていた。あと一束で千束になるという日に、体がすっかり弱くなった若者は、門の前の降り積もった雪の中に倒れて死んでしまった。政子姫は非常に悲しみ、それから2、3日後に、若者の後を追うように死んでしまった。姫の父親の大海は、2人をとっても不憫に思い、千束の錦木と一緒に、一つの墓に夫婦として埋葬した。その墓が後に錦木塚と呼ばれるようになったものである。

～鹿角の伝説・錦木を題材にした歌～

錦木の千束にかぎりなかりせば
猶こりずまに立てましものを
賀茂重保
思兼ね今日たて初むる錦木の
千束もまた逢ふ由もかな
大藏卿匡房
いたづらに千束くちにし錦木を
なをこりずまにおもひたつかな
藤原永實
錦木も千束にならで逢坂の
越ゆるを許せ下紐の関

錦木は立てながらこそ朽ちにけれ
今日の細布胸あはじとや
能因法師『後拾遺集』
ちつかまでたつる錦木いたづらに
あはで朽ちなん名こそ惜しけれ
藤原定家
錦木は千束(ちづか)になりぬ今こそは
人に知られぬ閨(ねや)の内見め
『俊頼髓脳』
錦木を作りて古き戀を見ん
芭蕉

美味しいお米とりんごのご注文 / お問い合わせ先は・・・

〒018-5201 秋田県鹿角市花輪字赤川端7-3

有限会社 安保金太郎商店

フリーダイヤル: 0120-08-2028

e-mail kintaro@umaikome.jp



当地に伝わる伝説の「錦木塚」。今はJR花輪線・十和田南駅に程近い公園の一角で静かにたたずむ。



こちらのホームページで鹿角地域の観光情報や特産品などの案内がご覧いただけます。

(社)十和田八幡平観光物産協会

<http://www.ink.or.jp/~kankou18/>

かつの三姫のブログ

<http://blog.livedoor.jp/kazuno2007/>

ぜひ一度

かつの

鹿角へ遊びに

来てみて下さい!!

有限会社 安保金太郎商店

かつの微生物農法研究会

事務局

文・写真: 安保 大輔

この「微生物農法研究会便り」のバックナンバーや、毎月発送などのご希望がありましたらご一報下さい。感想もお待ちしています。